

ボランティア体験が中学生と高校生のボランティア 活動意欲に及ぼす影響¹⁾

山本 陽一*

The Effect of Volunteer Experience on Intension for Volunteering in Junior and Senior
High School Students

Youichi YAMAMOTO*

We examined the effects of volunteering experience on volunteer intention for junior high school students and high school students ($N = 170$) who had involved in short-term volunteer activities in the community. As a result of the factor analysis, the volunteer motivation was classified into three groups including “other-oriented motive”, “self-oriented motive” and “required motive” (e.g., the school required their participation). Also, the subjective experience during the volunteering was classified into two groups including the “interpersonal positive experience” (e.g., getting along with other volunteers) and “negative experience” (e.g., not being helpful). The result of pass analysis found that empathic concern in volunteering predicted helping effects on helpers (satisfaction), in which interpersonal positive and negative experiences mediated. However, no effect of personal distress was found. Helping effects on helpers and volunteering intention were predicted by other-oriented motive, and volunteering intention was predicted by self-oriented motive, which were mediated by interpersonal positive experience and helping effects on helpers. Required motive decreased helping effects on helpers, mediated by negative experience.

key words: volunteer activities, volunteer motives, empathy, intention for volunteering

問 題

ボランティア活動は、“報酬を目的としないで自分の労力、技術、時間を提供して地域社会や個人・団体

の福祉増進のために行う活動”と定義される(総務省統計局, 2003)。日本では、1995年に発生した阪神・淡路大震災を契機として、ボランティア活動への関心が高まった(池田, 2006)。また、ボランティア活

¹⁾ 本研究は、平成22年度筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻修士論文の一部を修正したものである。本研究の一部は、日本心理学会第75回大会、日本社会心理学会第52回大会において発表された。

本論文の作成に当たり、ご指導いただいた松井豊教授(筑波大学)に感謝申し上げます。

質問紙調査の実施にご協力いただいた行政機関の皆様と、質問紙調査に回答いただいた中学生と高校生の皆様に感謝申し上げます。

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

University of Tsukuba, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0012, Japan

動などを通じた地域住民による支え合いが、少子高齢化が進む地域社会において重要になることが指摘されていた(厚生労働省, 2010)。さらに、豊かな人間性や社会性を育む活動として、青少年のボランティア活動が奨励されており(中央教育審議会, 1996:2002)、学校や地域でボランティア活動を体験する機会が提供されている。

このように、日本においてボランティア活動への関心は高まっており、ボランティア活動が果たす社会的役割は今後ますます重要になると考えられる。こうした社会背景から、ボランティア活動への参加を促進する要因を検討する必要がある。また、青少年がボランティア活動を体験する機会が増えていたが、青少年を対象とした研究では、青年期のボランティア活動参加が成人前期のボランティア活動参加を促進することが示唆されていた(Astin, Sax, & Avalos, 1999)。この結果から、青年期のボランティア体験を通して、成人期でのボランティア活動意欲が高まり、ボランティア活動への参加が促進されることが期待される。

本研究では、将来のボランティア活動への参加を規定すると考えられるボランティア体験後のボランティア活動への参加意欲に対して、中学生と高校生のボランティア体験が及ぼす影響について検討する。

中学生と高校生のボランティア体験に関する心理学的研究(山本・松井, 2014)では、ボランティア体験への参加動機とボランティア体験から得られる心理的報酬である援助成果の内容について検討が行われている。山本・松井(2014)では、ボランティア体験への参加動機や援助成果が複数存在することや、ボランティア体験への参加動機と援助成果との対応関係が示唆されていたが、ボランティア体験への参加動機や援助成果とボランティア体験後のボランティア活動意欲との関連については検討されていなかった。

一方、成人のボランティア活動に関する心理学的研究では、特性共感やボランティア動機といった活動者の特性に関わる要因と、活動中の主観的経験や活動の満足感や援助成果といった活動経験に関わる要因が、活動への従事期間といったボランティア活動意欲を表す要因に及ぼす影響が検討されてきた(Snyder & Omoto, 2008)。本研究では、こうした成

人のボランティア活動に関する心理学的研究で得られた知見を、中学生と高校生のボランティア体験に援用して検討を行う。以下順に、ボランティア動機、特性共感、ボランティア活動の援助成果とボランティア活動意欲との関連を検討した研究から、本研究で検討を行う仮説を導出する。

ボランティア動機がボランティア活動意欲に及ぼす影響に関する研究

ボランティア動機に関する研究では、ボランティア動機の内容に関する研究と、ボランティア動機がボランティア活動意欲に及ぼす影響に関する研究が行われている。

ボランティア動機の内容に関する海外研究(Clary, Snyder, Ridge, Copeland, Stukas, Haugen, & Miene, 1998; Cornelis, Van, & De Cremer, 2013; Davis, Hall, & Meyer, 2003)は、成人を対象に検討が行われ、複数の動機が確認されている。例えばClary et al.(1998)では、成人のボランティア動機として“価値”、“知識”、“強化”、“自我防衛”、“キャリア”、“社会適応”の6因子が確認されているが、これらの動機は困っている人を助けたいといった“他者志向の動機 (other-oriented motive)”と、活動が自分自身の役に立つといった“自己志向の動機 (self-oriented motive)”の2側面に分類されていた(Cornelis et al., 2013; Davis et al., 2003)。

このように、海外研究ではボランティア動機は他者志向の動機と自己志向の動機の2側面に分類されていた。一方、国内研究(田引, 2005, 2008; 山口・高木, 1993)では、海外研究と同様に他者志向の動機と自己志向の動機が確認されていたが(e.g., 山口・高木, 1993)、断ることが難しい相手から頼まれて活動に参加したという“組織的義務動機(田引, 2005)”や“依頼動機(田引, 2008)”も含まれていた。これらの結果を、ボランティア体験に適用して考えると、他者志向の動機と自己志向の動機に加えて、断りづらい相手からの要請に基づいて参加したといった内容の動機が含まれる可能性が考えられる。

そこで本研究では、ボランティア体験への参加動機を、他者志向の動機と自己志向の動機の2側面に加えて、断りづらい相手からの要請に基づいて参加したという内容の動機を要請動機と定義し、検討を行う。

一方、ボランティア動機がボランティア活動意欲に及ぼす影響を検討した研究(北山・大西・河野, 2009; Omoto & Snyder, 1995; Penner & Finkelstein, 1998; 田引, 2005)では、ボランティア動機が活動の満足感や活動への従事期間に及ぼす影響が検討されている。Omoto & Snyder (1995)では、自己志向の動機は、活動への従事期間を直接規定していたが、他者志向の動機は活動への従事期間を直接規定しなかった。また Penner & Finkelstein (1998)では、他者志向の動機と自己志向の動機は、活動の満足感を媒介して活動への従事期間を規定していた。一方、国内研究(北山他, 2009; 田引, 2005)では、自己志向の動機は活動の満足感を高めていたが、組織的義務動機(田引, 2005)や依頼動機(田引, 2008)といった要請動機は、活動の満足感を低下させていた。

このように、3種類のボランティア動機は、活動の満足感や活動への従事期間に及ぼす影響が異なっていた。自己志向の動機は、活動の満足感と活動への従事期間を直接規定していた。他者志向の動機は、活動の満足感を媒介して活動への従事期間を規定していたが、活動への従事期間に直接及ぼす影響については明確ではなかった。要請動機は活動の満足感を低下させていたが、活動への従事期間に及ぼす影響については検討されていなかった。これらの結果を、ボランティア体験に適用して考えると、自己志向動機と他者志向動機は、ボランティア体験の援助成果を高めることにより、その後のボランティア活動意欲を間接的に高めると予測される。また要請動機は、ボランティア体験の援助成果を低下させることにより、その後のボランティア活動意欲を間接的に低下させる可能性が考えられる。

そこで本研究では、3種類のボランティア体験への参加動機(自己志向動機、他者志向動機、要請動機)が、ボランティア体験後の援助成果とその後のボランティア活動意欲に及ぼす影響について検討する。**特性共感がボランティア活動意欲に及ぼす影響に関する研究**

共感(empathy)は、“他者の立場や状態を理解することにより生じる代償的な情動反応”と定義される(Eisenberg & Fabes, 1991)。また共感は、状態としての共感である状態共感と、性格としての共感である特性共感に区別されるが、ボランティア活動

に関する先行研究では特性共感とボランティア活動意欲との関連が検討されているため、本研究では特性共感に着目する。特性共感がボランティア活動意欲に及ぼす影響を検討した研究(Davis, Mitchell, Hall, Lothert, Snapp, & Meyer, 1999)では、他者志向の特性共感である共感的関心は、活動中の暖かい感情経験(肯定的経験)を高めることにより、活動の満足感とボランティア活動意欲を高めていた。一方、自己志向の特性共感である個人的苦痛は、活動中の苦痛を伴う感情経験(否定的経験)を高めることにより、活動の満足感とボランティア活動意欲を低下させていた。

このように、特性共感とは活動中の主観的経験や活動の満足感といった活動中の経験に関わる要因を媒介してボランティア活動意欲に影響を及ぼしていた。これらの結果をボランティア体験に適用して考えると、特性共感が活動経験に関わる要因に影響を及ぼして、その後のボランティア活動意欲に間接的に影響を及ぼす可能性が考えられる。

そこで本研究では、特性共感がボランティア体験中の主観的経験とボランティア活動意欲に及ぼす影響について検討する。ボランティア体験中の主観的経験については、先行研究に従ってボランティア体験中の肯定的経験と否定的経験の2側面から検討する。

ボランティア活動の援助成果がボランティア活動意欲に及ぼす影響に関する研究

援助成果は、“向社会的行動において、他者との相互作用を通して、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬”と定義される(妹尾, 2001)。ボランティア活動の援助成果に関する研究(妹尾, 2008; 妹尾・高木, 2003)では、ボランティア活動から得られる援助成果の内容と、援助成果が活動の継続意欲に及ぼす影響が検討されている。妹尾・高木(2003)では、援助成果は“愛他的精神の昂揚”、“人間関係の広がり”、“人生への意欲喚起”に分類され、これらの援助成果はボランティア活動の継続意欲を規定していた。また妹尾(2008)では、援助成果は“愛他的精神の昂揚”、“人間関係の広がり”、“自己報酬感”の3つに分類され、これらの援助成果はボランティア活動の継続意欲を規定していた。

このように、ボランティア活動の援助成果はボランティア活動の継続意欲を規定していた。この結果

をボランティア体験に適用して考えれば、ボランティア体験後の援助成果が高いほどその後のボランティア活動意欲が高まると予測される。その一方で、特性共感やボランティア動機の研究では、特性要因が活動への満足感といった活動中の経験に関わる要因を媒介してボランティア活動意欲に影響を及ぼしていた。援助成果は活動経験に関わる要因と考えられることから、特性共感やボランティア動機の影響を受けることが予測されるが、援助成果と特性共感やボランティア動機との関連については検討されていなかった。

そこで本研究では、ボランティア体験後の援助成果がボランティア活動意欲に及ぼす影響と、特性共感とボランティア体験への参加動機がボランティア体験後の援助成果に及ぼす影響について検討する。

目 的

以上のように、ボランティア活動に関する心理学的研究では、活動者の特性に関わる要因と活動経験に関わる要因がボランティア活動意欲に関わる要因に影響を及ぼしていた。こうした知見を、中学生と高校生のボランティア体験に適用すると、以下の仮説が導かれる。

仮説1：ボランティア体験への参加動機は、他者志向動機、自己志向動機、要請動機の3側面に分類される。

仮説2：他者志向動機と自己志向動機は、ボランティア体験後の援助成果を媒介して、ボランティア活動意欲を間接的に規定する。一方、要請動機は、ボランティア体験後の援助成果を媒介して、ボランティア活動意欲を間接的に規定する。

仮説3：特性共感(共感的関心、個人的苦痛)は、ボランティア体験中の主観的経験(肯定的経験、否定的経験)を媒介して、ボランティア体験後の援助成果とボランティア活動意欲を間接的に規定する。

仮説4：ボランティア体験の援助成果は、ボランティア活動意欲を規定する。また、特性共感とボランティア体験への参加動機は、ボランティア体験後の援助成果を規定する。

本研究では、これらの仮説に基づいて、ボランティア体験が中学生と高校生のボランティア活動意欲に及ぼす影響について検討することを目的とする。

方 法

調査対象となった事業の概要

社会福祉協議会や自治体が、夏季休暇中の中学生と高校生を主な対象として実施する“ボランティア体験事業”での体験(以下、ボランティア体験と表記する)を調査対象とした。ボランティア体験には、以下に示す特徴がある。第一に、ボランティア体験は、ボランティア活動への理解を深めることを目的として実施されるため、活動が一定期間継続するボランティア活動とは異なり、体験期間内で活動は終了する。第二に、ボランティア体験は、活動未経験者を参加対象に含むために、活動に必要な技術や知識を参加条件としていない。第三に、ボランティア体験で行う活動には、河川の清掃といった被援助者と関わらない活動も含まれている。本研究では、体験する活動を参加者自身が選択でき、参加者を対象とした事前説明会を行う首都圏近郊の2カ所を調査対象とした²⁾。

調査対象者

ボランティア体験参加者のうち、事前説明会に参加した中学生と高校生653名を調査対象者とした。

調査期間

2010年7月10日から、9月3日に実施した。

調査票の配布および回収方法

調査票の配布は、参加者を対象とした事前説明会で行った。調査票は、(a)体験前の調査と(b)体験後の調査の2種であった。(a)体験前の調査の質問項目には、体験開始前の2010年7月10日から7月20日の期間に回答し、(b)体験後の調査には、体験終了後の2010年8月20日から8月30日の期間に回答するように求めた。調査は無記名で実施され、調査票の表面には調査への回答は学校の評価とは関係がないことや、調査への協力は調査協力者の自由意思に基づくものであり、調査に協力しない場合にも何ら不利益が生じないことや、回答したくない項目については無理に回答する必要がないことを記載した。これらの事項については、調査票配布時に調査協力先の担当職員より口頭で説明を行い、調査票に同封した保護者への依頼状にも明記した。調査票2種

²⁾ ボランティア体験事業実施前に行われる事前説明会は、数名の参加者が欠席していたが、これらの参加者には調査票を配布しなかった。

は、9月3日までに著者宛の専用封筒を用いて個別郵送回収を行った³⁾。

調査内容

1. **基本属性** 性別、学校種別、活動日数について尋ねた。

2. **以前のボランティア活動経験** 以前のボランティア活動経験の有無について、“あなたは、これまでにボランティア活動に参加したことはありますか”という1項目で尋ねた。

3. **特性共感(5件法)** 特性共感を測定する尺度として、多次元共感性尺度(登張, 2003)の下位尺度である共感的関心と個人的苦痛の各6項目を用いた。共感的関心については、“困っている人がいたら助けたい”、“体の不自由な人やお年寄りに何かしてあげたいと思う”、“心配のあまり取り乱している人を見ると、なんとかしてあげたい”、“落ち込んでいる人がいたら、勇気づけてあげたい”、“悲しい体験をした人の話を聞くと、つらくなってしまう”、“他人をいじめている人がいると、腹が立つ”の6項目を用いた。

4. **ボランティア体験への参加動機(5件法)** ボランティア体験への参加動機を測定する尺度として、大学生と成人を対象に作成された山口・高木(1993)のボランティア動機測定尺度より12項目、山本・松井(2014)を参考に8項目、計20項目を用いた。ボランティア体験では、活動に必要な知識や技術を参加条件としていなかった。また体験事業は数日間で終了し、活動の継続を前提としていなかった。さらに調査対象者が体験する内容については、河川の清掃のように被援助者が存在しない活動が含まれていた。これらの3点から、山口・高木(1993)より、“自分の持っている知識、技術を使う練習になるから”、“毎日の生活が充実している感じになるから”、“自分の知識、経験、技術を活かすことができるから”、“人に喜んでもらえるから”、“対象者の苦しみややわらぐから”、“対象者が積極的に社会参加できるから”の6項目を除外した。表現については、中学生でも理解できるように平易な表現に修正した。たとえば、“何らかの報酬や返礼が期待できる”を“何らかのお礼(お返し)が期待できるから”などに修正

した。また、ボランティア体験参加者を対象とした山本・松井(2014)を参考に、“困っている人を助けるのは当然のことだから”、“ボランティアに興味があったから”、“何か新しく感動できる体験をしたいと思ったから”、“自分にとって得になることがあるから”、“学校の宿題(課題)だったから”、“親や家族に参加するように言われたから”、“友だちに誘われたから”、“学校の先生から参加するように言われたから”の8項目を独自作成した。

5. **ボランティア体験中の主観的経験(5件法)** ボランティア体験中の経験内容を測定する尺度を作成するために、調査協力先より過去のボランティア体験参加者363名(中学生180名、高校生183名)の感想文を入手した。入手した感想文の内容分析を行い、ボランティア体験中に経験した内容に関する記述を183件(中学生96件、高校生87件)抽出した。記述された内容は、“活動は疲れた(48件)”や“活動中に戸惑うことがあった(33件)”“役に立てなかった(3件)”といった否定的な内容の5カテゴリーと、“対象者と仲良くなった(41件)”や“対象者から感謝された(18件)”“受け入れ先の職員やスタッフと仲良くなった(18件)”“地域のボランティアと仲良くなった(6件)”といった肯定的な内容の6カテゴリーに分類された。これらの結果から、被援助者との肯定的な関わりに関する内容であった1カテゴリーを除外して、調査対象者のボランティア体験中の主観的経験に関する10カテゴリーを項目として採用した。調査項目については、調査対象者の回答しやすさに配慮して、肯定的内容から否定的内容の順に配置した。調査項目への教示文として、「あなたが行った活動の中で、以下のような出来事はありましたか」を用いた。

6. **ボランティア体験後の援助成果(5件法)** ボランティア体験後の援助成果を測定する項目として、妹尾・高木(2003)の援助成果測定尺度より14項目を用いた。妹尾・高木(2003)は17項目で構成されているが、ボランティア動機と同様に、被援助者との関わりに関する内容を含んだ“対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になった”、“対象者や他のボランティアなど人と行動を共にする喜びを感じた”、“対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた”の3項目を除外した。調査項目への教示文として、「今回の活動をふりかえり、あ

³⁾調査実施前に、筑波大学研究倫理委員会の承諾を得た(承認番号22-84)。

Table 1 ボランティア体験への参加動機の因子分析結果 (主因子法, バリマックス回転, $n=161$)

| 項目 | F1 | F2 | F3 | h^2 | M | SD |
|--|-------|-------|-------|-------|------|------|
| F1 自己志向動機 ($M=3.79$, $SD=0.69$, $\alpha=.783$) | | | | | | |
| 4 自分を成長させることができるから | .727 | .091 | -.027 | .538 | 4.10 | 0.92 |
| 2 何か新しく感動できる体験をしたいと思ったから | .649 | .226 | .051 | .475 | 3.76 | 0.88 |
| 5 自分の生活や将来の仕事に役に立つと思ったから | .610 | .135 | -.135 | .409 | 4.02 | 1.02 |
| 1 ボランティアに興味があったから | .608 | .176 | -.206 | .443 | 4.34 | 0.81 |
| 3 余暇 (休み) が有効に使えるから | .604 | .133 | .126 | .398 | 3.49 | 1.25 |
| 8 他のボランティアと楽しく活動できるから | .464 | .330 | .123 | .340 | 3.04 | 1.06 |
| F2 他者志向動機 ($M=3.74$, $SD=0.92$, $\alpha=.884$) | | | | | | |
| 16 困っている人を助けるのは当然のことだから | .185 | .881 | -.047 | .813 | 3.87 | 1.04 |
| 15 社会の一員として当然のことだから | .199 | .836 | -.024 | .739 | 3.55 | 1.05 |
| 14 人はたがいに助け合わなければならないし, 自分にもその義務があるから | .310 | .733 | -.038 | .635 | 3.79 | 1.03 |
| F3 要請動機 ($M=1.86$, $SD=1.11$, $\alpha=.726$) | | | | | | |
| 20 学校の先生から参加するように言われたから | .118 | -.029 | .904 | .832 | 1.84 | 1.34 |
| 18 学校の宿題 (課題) だったから | -.002 | -.071 | .747 | .563 | 1.83 | 1.42 |
| 19 親や家族に参加するように言われたから | -.085 | .024 | .418 | .182 | 1.90 | 1.35 |
| 負荷量の平方和 | 2.46 | 2.25 | 1.65 | | | |
| 寄与率 (%) | 20.5 | 18.8 | 13.7 | | | |

なた自身はどのように思いましたか」を用いた。

7. ボランティア活動意欲 (5 件法) “ボランティア体験後もボランティア活動に参加したい” という気持ちを, ボランティア活動意欲と操作的に定義し, “今後もボランティア活動に参加したい” という 1 項目で尋ねた。

1. 基本属性から 4. ボランティア体験への参加動機は, (a) 体験前の調査で回答するように求め, 5. ボランティア体験中の主観的経験から 7. ボランティア活動意欲は, (b) 体験後の調査で回答するように求めた。

5 件法の質問項目はすべて, “1. あてはまらない”, “2. あまりあてはまらない”, “3. どちらともいえない”, “4. まああてはまる”, “5. あてはまる” で測定した。

その他に, (b) 体験後の調査には, 体験した活動の内容や, 体験後の振り返りの機会の有無について尋ねる項目があったが, 分析に用いなかったため掲載を略す。

結 果

回収した調査票から, 2 種の調査のいずれかが同封されていなかった 6 名を除外し, 170 名を分析対象とした (有効回答率 26.0%)。有効回答者の性別は,

男子 33 名 (中学生 32 名 (18.8%), 高校生 1 名 (0.6%)), 女子 137 名 (中学生 100 名 (58.8%), 高校生 37 名 (21.8%)), 活動日数は 1~5 日の範囲であり, 体験を行った日数の平均は 2.36 日 ($SD=1.53$) であった。

以前のボランティア活動経験

以前のボランティア活動経験について尋ねたところ, 活動経験者の割合は 35.9% であった。

特性共感

特性共感の下位尺度毎に信頼性係数を求めたところ, 信頼性係数はいずれも高かったため, “共感的関心” ($M=4.20$, $SD=0.59$, $\alpha=.812$), “個人的苦痛” ($M=3.02$, $SD=0.83$, $\alpha=.788$) の 2 尺度で構成した。

ボランティア体験への参加動機

ボランティア体験への参加動機に関する 20 項目について, 因子構造の検討を行った。回転前の固有値の減衰状況 (5.95, 2.49, 1.58, 1.40...) と解釈可能性から, 3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで 3 因子を仮定して主因子法, バリマックス回転による因子分析を行い, いずれの因子にも .40 以上の負荷を示さなかった “9 いい気分になれるから”, “10 何らかのお礼 (お返し) が期待できるから”, “11 自分にとって得なことがあるから”, “12 人に喜んでもらえるから”, “17 友だちに誘われたから” の 5

Table 2 ボランティア体験中の主観的経験の因子分析結果(主因子法, バリマックス回転, $n=159$)

| 項目 | F1 | F2 | h^2 | M | SD |
|--|---------|------|-------|------|------|
| F1 対人的ポジティブ経験 ($M=3.66$, $SD=0.83$, $\alpha=.786$) | | | | | |
| 1 一緒に活動した地域のボランティアと仲良くなった | .833 | .052 | .697 | 3.45 | 1.19 |
| 4 一緒に活動した地域のボランティアから感謝された | .691 | .109 | .489 | 3.56 | 1.06 |
| 2 一緒に活動した中学生や高校生と仲良くなった | .686 | .000 | .471 | 3.43 | 1.39 |
| 3 受け入れ先の職員・スタッフと仲良くなった | .540 | .114 | .305 | 3.94 | 0.92 |
| 5 受け入れ先の職員やスタッフから感謝された | .508 | .151 | .281 | 3.88 | 1.04 |
| F2 ネガティブ経験 ($M=2.18$, $SD=0.74$, $\alpha=.623$) | | | | | |
| 9 役に立てなかった | -.142 | .747 | .249 | 1.99 | 1.17 |
| 8 活動の意義や目的が理解できなかった | -.068 | .564 | .578 | 1.62 | 0.87 |
| 7 活動の中でイヤだと思える出来事があった | .038 | .471 | .323 | 1.97 | 1.00 |
| 6 活動はつかれた | -.215 | .450 | .223 | 3.18 | 1.28 |
| | 負荷量の平方和 | 2.26 | 1.35 | | |
| | 寄与率 (%) | 25.2 | 15.0 | | |

項目と、複数の因子に.40以上の負荷を示した“6 新しい友だちや知り合いができると思ったから”、“7 活動を通じて積極的に社会参加できるから”、“13 人や社会の役に立てるから”の3項目を除外して、最終的に3因子12項目を採用した(回転前の累積寄与率63.1%, Table 1)。

第1因子は、ボランティア体験への参加が自分自身の役に立つといった内容であったため、“自己志向動機”($M=3.79$, $SD=0.69$, $\alpha=.783$)と命名した。第2因子は、困っている人を助けるためや、地域のためにボランティア体験に参加したといった内容であったため、“他者志向動機”($M=3.74$, $SD=0.92$, $\alpha=.884$)と命名した。第3因子は、学校の先生や家族から要請されてボランティア体験に参加したといった内容であったため、“要請動機”($M=1.86$, $SD=1.11$, $\alpha=.726$)と命名した。

ボランティア体験中の主観的経験

ボランティア体験中の主観的経験に関する10項目について、因子構造の検討を行った。回転前の固有値の減衰状況(3.03, 1.85, 1.16…)と解釈可能性から、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで2因子を仮定して、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、いずれの因子にも.40以上の負荷を示さなかった“10 どのように活動したら良いかわからず困ったり、戸惑ったりしたことがあった”の1項目を除外し、2因子9項目を採用した(回転前の累積寄与率52.7%, Table 2)。

第1因子は、ボランティア体験中の対人的に好ま

しい経験を表す内容であったため、“対人的ポジティブ経験”($M=3.66$, $SD=0.83$, $\alpha=.786$)と命名した。第2因子は、“役に立てなかった”といったボランティア体験中の否定的経験を表す内容であったため“ネガティブ経験”($M=2.18$, $SD=0.74$, $\alpha=.623$)と命名した。

ボランティア体験後の援助成果

ボランティア体験後の援助成果に関する14項目について、因子構造の検討を行った。固有値の減衰状況(7.10, 1.18, 0.86…)から1因子構造が妥当と判断された。主成分分析の結果、全ての項目が.40以上の負荷を示したため、14項目で尺度を構成した(累積寄与率47.5%)。ボランティア体験後の援助成果の平均値は4.08($SD=0.66$)、 α 係数は.913であった(Table 3)。

ボランティア活動意欲

ボランティア活動意欲について、“今後もボランティア活動に参加したい”という1項目で尋ねたところ、平均値は4.38($SD=0.80$)であった。

以前のボランティア活動経験による違い

以前のボランティア活動経験による違いを検討するために、調査対象者を活動経験の有無により2群に分け、平均値の差の検定を行った。結果をTable 4に示す。活動経験者は、活動未経験者よりも自己志向動機、対人的ポジティブ経験、ボランティア体験後の援助成果、ボランティア活動意欲が高かった。一方、活動未経験者は、活動経験者よりも要請動機が高かった。

Table 3 ボランティア体験後の援助成果の主成分分析結果 (n=156)

| 項目 | 負荷量 | M | SD |
|------------------------------------|------|------|------|
| 8 気持ちの達成感が生まれた | .792 | 4.31 | 0.88 |
| 14 日常生活の中で人との関わり方が良くなった | .786 | 3.70 | 1.04 |
| 7 やりがいが生まれた | .779 | 4.29 | 0.87 |
| 10 活動をすることが生活の中で重要な部分となり、自分のものとなった | .772 | 3.85 | 1.04 |
| 13 人や地域の役に立ちたいという気持ちが生まれた | .754 | 4.26 | 0.81 |
| 3 人に対して思いやることを考えるようになった | .749 | 4.26 | 0.83 |
| 9 「もっと～したい」「今度は～したい」など、目標ができた | .737 | 4.29 | 0.93 |
| 5 活動を通じて喜びや感動を経験できた | .733 | 4.31 | 0.85 |
| 4 活動を通じて自分自身が成長できた | .732 | 4.40 | 0.78 |
| 11 新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった | .686 | 3.85 | 1.19 |
| 6 自分が必要とされていることを感じることができ、自信につながった | .665 | 3.78 | 0.97 |
| 12 自分にできることで社会と関わり、人の役に立つことができた | .644 | 4.06 | 0.92 |
| 2 活動そのものを楽しむことができた | .622 | 4.63 | 0.62 |
| 1 仲の良い友達ができた | .440 | 3.17 | 1.50 |
| 固有値 | 7.10 | | |

Table 4 ボランティア活動経験の有無による違い

| | n | M | SD | t-value |
|-------------------|-------------------|--------------|--------------|---------------------------------------|
| 1) 共感的関心 | 経験有 58 経験無 108 | 4.33 4.21 | 0.56 0.64 | $t(164) = 1.21, n.s.$ |
| 2) 個人的苦痛 | 経験有 59 経験無 105 | 3.56 3.37 | 0.90 0.99 | $t(162) = 1.16, n.s.$ |
| 3) 自己志向動機 | 経験有 59 経験無 107 | 3.99 3.67 | 0.57 0.73 | $t(164) = 2.87, p < .01$ 経験有 > 経験無 |
| 4) 他者志向動機 | 経験有 60 経験無 107 | 3.83 3.69 | 0.83 0.97 | $t(165) = 0.89, n.s.$ |
| 5) 要請動機 | 経験有 59 経験無 107 | 1.62 2.00 | 0.98 1.15 | $t(164) = 2.16, p < .05$ 経験有 < 経験無 |
| 6) 対人的ポジティブ経験 | 経験有 58 経験無 103 | 3.86 3.55 | 0.81 0.82 | $t(159) = 2.31, p < .01$ 経験有 > 経験無 |
| 7) ネガティブ経験 | 経験有 60 経験無 107 | 2.12 2.22 | 0.77 0.73 | $t(165) = 0.80, n.s.$ |
| 8) ボランティア体験後の援助成果 | 経験有 56 経験無 100 | 4.26 3.99 | 0.61 0.67 | $t(154) = 2.48, p < .05$ 経験有 > 経験無 |
| 9) ボランティア活動意欲 | 経験有 57 経験無 102 | 4.61 4.25 | 0.56 0.89 | $t(157) = 2.76, p < .01$ 経験有 > 経験無 |

ボランティア活動意欲の規定因

ボランティア活動意欲を規定する要因を検討するために、重回帰分析の繰り返しによるパス解析を行った。パス解析では、第1水準には以前のボランティア活動経験、特性共感、ボランティア体験への参加動機、第2水準にはボランティア体験中の主観的経験、第3水準にはボランティア体験後の援助成果、

第4水準にはボランティア活動意欲を配置した。以前のボランティア活動経験については、活動経験ありを1、活動経験なしを0とするダミー変数を用いた。重回帰分析は、多重共線性の影響を考慮して変数増加法を用い、投入された変数の標準偏回帰係数の有意水準5%で投入を打ち切った。分析に用いた変数間の相関係数をTable 5に、パス解析の結果を

Table 5 変数間の相関 (n=149)

| | 1) | 2) | 3) | 4) | 5) | 6) | 7) | 8) | 9) |
|-------------------|--------|---------|-------|--------|--------|--------|--------|---------|--------|
| 1) ボランティア活動経験 | — | | | | | | | | |
| 2) 共感的関心 | .094 | — | | | | | | | |
| 3) 個人的苦痛 | .091 | -.167* | — | | | | | | |
| 4) 自己志向動機 | .219** | .237** | .145 | — | | | | | |
| 5) 他者志向動機 | .069 | .395** | -.036 | .447** | — | | | | |
| 6) 要請動機 | -.166* | -.122 | .199* | .008 | -.053 | — | | | |
| 7) 対人的ポジティブ経験 | .180* | .342** | -.010 | .358** | .331** | -.050 | — | | |
| 8) ネガティブ経験 | -.062 | -.266** | .178* | -.113 | -.186* | .226** | -.194* | — | |
| 9) ボランティア体験後の援助成果 | .196* | .388** | -.073 | .465** | .544** | -.056 | .614** | -.333** | — |
| 10) ボランティア活動意欲 | .215** | .245** | -.020 | .398** | .501** | -.135 | .266** | -.170* | .601** |

** $p < .01$, * $p < .05$

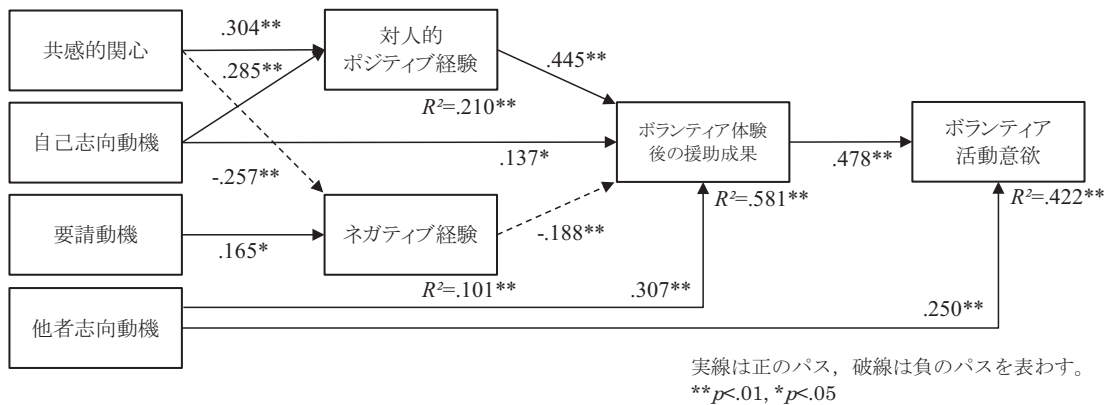


Figure 1 ボランティア活動意欲を規定する要因 (n=134)

Figure 1 に示す。対人的ポジティブ経験は、自己志向動機 ($\beta = .285, p < .01$) と共感的関心 ($\beta = .304, p < .01$) によって規定されていた ($R^2 = .210, p < .01$)。ネガティブ経験は、共感的関心 ($\beta = -.257, p < .01$) と要請動機 ($\beta = .165, p < .05$) によって規定されていた ($R^2 = .101, p < .01$)。ボランティア体験後の援助成果は、対人的ポジティブ経験 ($\beta = .445, p < .01$)、他者志向動機 ($\beta = .307, p < .01$)、ネガティブ経験 ($\beta = -.188, p < .01$)、自己志向動機 ($\beta = .137, p < .05$) によって規定されていた ($R^2 = .581, p < .01$)。ボランティア活動意欲は、ボランティア体験後の援助成果 ($\beta = .478, p < .01$) と他者志向動機 ($\beta = .250, p < .01$) によって規定されていた ($R^2 = .422, p < .01$)。

考 察

本研究は、ボランティア活動に関する心理学的研究で得られた知見を、中学生と高校生が行うボランティア体験に援用し、活動者の特性に関わる要因と活動経験に関わる要因が、ボランティア体験後のボランティア活動意欲に及ぼす影響について検討を行った。因子分析の結果、ボランティア体験への参加動機は、自己志向動機、他者志向動機、要請動機の3側面に分類された。ボランティア体験中の主観的経験は、対人的ポジティブ経験とネガティブ経験の2側面に分類された。ボランティア体験後の援助成果は1側面に分類された。パス解析の結果、ボランティア活動意欲は、ボランティア体験後の援助成果と他者志向動機によって高まっていた。考察では、ま

ず分析に用いた変数の因子構造について述べ、次にボランティア活動意欲を規定する要因について述べる。

ボランティア体験への参加動機は、“自己志向動機”、“他者志向動機”、“要請動機”の3側面に分類された。ボランティア動機に関する海外研究(Cornelis et al., 2013 など)では、ボランティア動機は他者志向の動機と自己志向の動機の2側面に分類され、国内研究(田引, 2005 など)では、要請動機を加えた3側面に分類されており、本研究の結果は先行研究と整合していた。したがって、仮説1(ボランティア体験への参加動機は、他者志向動機、自己志向動機、要請動機の3側面に分類される)は支持された。

ボランティア体験中の主観的経験は、“対人的ポジティブ経験”と“ネガティブ経験”に分類された。対人的ポジティブ経験は、一緒に活動したボランティアと仲良くなったといった、活動者間の肯定的な交流経験を表していた。一方、ネガティブ経験は、役に立てなかったという気持ちや、活動の目的を理解できなかったといった活動中の否定的経験を表していたが、尺度の信頼性係数はやや低かった。対人的ポジティブ経験は、ボランティア体験中の肯定的な交流経験に関する項目でまとまっていた。一方でネガティブ経験は、役に立てなかったといった効力感の欠如や、活動の中で嫌なことがあったといった不快体験といった項目で構成されており、項目間の類似性の低さが影響していると考えられる(高本・服部, 2015)。

ボランティア体験後の援助成果は、本研究では1因子であった。妹尾(2008)などでは、複数の援助成果が確認されており、本研究の結果は先行研究とは異なっていた。本研究の調査対象者は、先行研究よりも年齢が低く、活動の継続を前提としないボランティア体験に参加していた。また本研究では、ボランティア体験の内容との整合を考慮して、援助成果を構成する項目の一部を分析から除外していたため、先行研究とは異なる援助成果が抽出された可能性が考えられる。

以前のボランティア活動経験による違いについて検討した結果、活動経験者は、活動未経験者よりも自己志向動機、対人的ポジティブ経験、ボランティア体験後の援助成果、ボランティア活動意欲が高く、活動未経験者は、活動経験者よりも要請動機が高かった。

活動経験者が高かった変数は、いずれもボランティア活動意欲を高める変数であったことから、ボランティア活動経験がボランティア活動意欲を間接的に促進すると考えられる。一方、要請動機は活動未経験者に高い動機であり、ボランティア活動経験を通じて低減する動機と考えられる。

ボランティア体験への参加動機がボランティア活動意欲に及ぼす影響

自己志向動機は、対人的ポジティブ経験とボランティア体験後の援助成果を規定することにより、ボランティア活動意欲を間接的に規定していた。Omoto & Snyder (1998) などでは、自己志向動機は活動の満足感やボランティア活動意欲を高めていたことから、本研究の結果は先行研究と整合していた。自己志向動機が高いほど、ボランティア体験中の対人的に好ましい経験とボランティアから得られる心理的報酬が高まって、ボランティア活動意欲が高まると考えられる。

他者志向動機は、ボランティア体験後の援助成果とボランティア活動意欲を直接規定していた。先行研究では、他者志向動機の影響は明確ではなかったが、本研究の結果は他者志向の動機が活動の満足感を媒介してボランティア活動意欲を規定するというPenner & Finkelstein (1998) と整合していた。他者志向動機が高いほど、ボランティア体験から得られる心理的報酬とボランティア活動意欲が高まると考えられる。

また要請動機は、ボランティア体験中のネガティブ経験を高めることによって、ボランティア体験後の援助成果を間接的に低下させていた。北山他(2009)などでは、要請動機は活動の満足感を低下させており、本研究の結果は、先行研究で明らかにされていた要請動機の影響を精緻化したと考えられる。要請動機が高いほど、ボランティア体験中の否定的経験が高まって、ボランティアから得られる心理的報酬が低下すると考えられる。これらの結果から、仮説2(他者志向動機と自己志向動機は、ボランティア体験後の援助成果を媒介して、ボランティア活動意欲を間接的に規定する。要請動機は、ボランティア体験後の援助成果を媒介して、ボランティア活動意欲を間接的に規定する)は支持された。

特性共感がボランティア活動意欲に及ぼす影響

共感的関心は、対人的ポジティブ経験とネガティ

ブ経験を媒介して、ボランティア体験後の援助成果を間接的に規定していた。Davis et al.(1999)では、共感的関心は活動中の暖かい感情経験の予期を媒介して活動の満足感の予期とボランティア活動意欲を規定していたことから、本研究の結果は Davis et al.(1999)と概ね整合していた。共感的関心が高いほど、ボランティア体験中の対人的に好ましい経験を高めるとともに、ボランティア体験中の否定的経験を抑制して、ボランティア体験から得られる心理的報酬を高めると考えられる。一方、本研究では、個人的苦痛はボランティア体験中の主観的経験に影響を及ぼさなかった。Davis et al.(1999)では、個人的苦痛は活動中の苦痛を伴う感情経験の予期を媒介して活動の満足感の予期を低下させており、本研究の結果は Davis et al.(1999)とは異なっていた。本研究の調査対象者が体験した活動には、調査対象者が心理的苦痛を感じるような内容が含まれていなかったために、先行研究とは異なる結果が得られたと考えられる。これらの結果から、仮説3(特性共感(共感的関心、個人的苦痛)は、ボランティア体験中の主観的経験(肯定的経験、否定的経験)を媒介して、ボランティア体験後の援助成果とボランティア活動意欲を間接的に規定する)は部分的に支持された。

ボランティア体験後の援助成果がボランティア活動意欲に及ぼす影響

ボランティア体験後の援助成果は、ボランティア活動意欲を規定していた。妹尾(2008)などでは、援助成果がボランティア活動の継続意欲を規定していたことから、本研究は先行研究と整合していた。ボランティア体験から得られる心理的報酬が高いほど、ボランティア活動意欲が高まると考えられる。

またボランティア体験後の援助成果は、他者志向動機と自己志向動機によって直接規定されていた。また共感的関心と要請動機は、ボランティア体験中の主観的経験を媒介してボランティア体験後の援助成果を間接的に規定していた。妹尾(2008)などでは、活動者の特性に関わる要因と援助成果との関連は検討されていなかったが、本研究の結果から、援助成果は特性に関わる要因に影響されるという新たな知見が得られた。これらの結果から、仮説4(ボランティア体験の援助成果は、ボランティア活動意欲を規定する。特性共感とボランティア体験への参加動機は、ボランティア体験後の援助成果を規定する)は支持

された。

本研究の社会的意義

日本において、ボランティア活動が果たす社会的役割は今後ますます重要になると考えられ、青少年が行うボランティア活動にも関心が高まっていた。本研究では、成人を対象としたボランティア活動に関する心理学的研究の知見が、中学生と高校生が行うボランティア体験にも適用できることが新たに示された。

また本研究では、ボランティア体験後の援助成果がボランティア活動意欲を高めることが示された。ボランティア体験後の援助成果は、“気持ちの達成感が生まれた”や、“やりがいが生まれた”といった項目の平均値が高かった。青少年が学校や地域でボランティア活動を体験する機会が増えていたが、体験する機会を増やすだけではなく、青少年が達成感ややりがいを感じられる活動が提供されることが重要と考えられる。

さらに本研究では、特性共感やボランティア体験への参加動機といった活動者の特性に関わる要因が、ボランティア体験後の援助成果を高めるという新たな知見が得られた。これらの結果から、ボランティア体験とともに、共感や動機を高めるための事前学習もボランティア体験後の援助成果を高めるうえで有効と考えられる。例えば共感については、共感を高めるための教育的介入プログラムが開発され、小学生や中学生にも適用できることが指摘されている(西村・村上・櫻井, 2015)。こうしたプログラムを事前学習として導入することにより、ボランティア体験後の援助成果がさらに高まると考えられる。また要請動機は、ボランティア体験中のネガティブ経験を高めて、ボランティア体験後の援助成果を間接的に低下させていた。要請動機には学校の授業として参加したという内容が含まれ、ボランティア体験中のネガティブ経験には、活動で役に立てなかったといった内容や、活動の目的が理解できなかったという内容が含まれていた。ボランティア体験前の事前学習では、ボランティア体験で行う活動内容や目的を説明するとともに、具体的な活動方法について理解を深めることが必要と考えられる。

今後の課題

第一に、本研究では感想文の内容分析により、ボランティア体験中の主観的経験の項目を作成したが、

一般的に誰かに読まれる可能性がある感想文において、ボランティア体験を否定するような内容は表われにくいと考えられる。そのため、ボランティア体験中の主観的経験に関わる内容を十分に網羅できたとはいえない。また、ボランティア体験中の主観的経験に関する項目は、肯定的な内容から否定的な内容へと配置されていたために、項目提示順序によるバイアスが生じている可能性も考えられる。

第二に、本研究では、ボランティア体験後の援助成果はボランティア活動意欲を高めていたが、これらの変数はボランティア体験直後に測定されていた。そのため、これらの変数がその後どの程度維持されるかについては明らかにならない。ボランティア体験を含めた青年期のボランティア活動経験が、成人期のボランティア活動参加に及ぼす影響については、縦断的手法を用いた検討が必要と考えられる。

第三に、本研究は地域で実施されたボランティア体験を対象としており、学校教育の一環として行われる活動は対象としていない。学校教育の一環として行われる活動は、全員参加が原則となるため、本研究の調査対象者よりも要請動機が高まることが予測される。要請動機が高まりやすい活動において、本研究と同様の結果が得られるかについては別途検討が必要である。

引用文献

- Astin, A., Sax, L., & Avalos, J. 1999 The long-term effects of volunteerism during the undergraduate years. *Review of Higher Education*, **22**, 187-202.
- 中央教育審議会 1996 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (答申)
- 中央教育審議会 2002 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (答申)
- Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J. T., Stukas, A. A., Haugen, J. A., & Miene, P. K. 1998 Understanding and assessing the motivations of volunteerism: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1516-1530.
- Cornelis, I., Van, H. A., & De Cremer, D. 2013 Volunteer work in youth organizations: Predicting distinct aspects of volunteering behavior from self-and other-oriented motives. *Journal of Applied Social Psychology*, **43**, 456-466.
- Davis, M. H., Hall, J. A., & Meyer, M. 2003 The first year: Influences on the satisfaction, involvement, and persistence of new community volunteers. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 248-260.
- Davis, M. H., Mitchell, K. V., Hall, J. A., Lothert, J., Snapp, T., & Meyer, M. 1999 Empathy, expectations, and situational preference: Personality influences on the decision to participate in volunteer helping behaviors. *Journal of Personality*, **67**, 469-503.
- Eisenberg, N., & Fabes, R. A. 1991 Prosocial behavior and empathy. In Clark, M. S.(Ed.), *Prosocial behavior: Review of Personality and Social Psychology*. Vol. 12. Los Angeles: Sage. pp. 34-61.
- 池田幸也 2006 現代ボランティア論 久美株式会社.
- 北山明子・大西章恵・河野啓子 2009 障がい者に関わるボランティアの充実感に影響を与える要因 日本地域看護学会誌, **11**, 25-30.
- 厚生労働省 2010 これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書. (<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7a.html>)【最終アクセス日：2016年8月31日】
- 西村多久磨・村上達也・櫻井茂男 2015 共感性を高める教育的介入プログラム：介護福祉系の専門学校生を対象とした効果検証 教育心理学研究, **63**, 453-466.
- Omoto, A. M., & Snyder, M. 1995 Sustained helping without obligation: Motivation, longevity of service, and perceived attitude change among AIDS volunteers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 671-686.
- Penner, L. A., & Finkelstein, M. A. 1998 Dispositional and structural determinants of volunteerism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 525-537.
- Snyder, M., & Omoto, A. M. 2008 Volunteerism: Social issues and perspectives and social policy implications. *Social Issues and Policy Review*, **2**, 1-36.
- 妹尾香織 2001 援助行動における援助者の心理的效果：研究の社会的背景と理論的枠組み 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, **55**, 181-194.
- 妹尾香織 2008 若者におけるボランティア活動とその経験効果 花園大学社会福祉学部研究紀要, **16**, 35-42.
- 妹尾香織・高木 修 2003 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究, **18**, 106-118.
- 総務省統計局 2003 社会生活基本調査報告 (平成 13 年) 日本統計協会.
- 田引俊和 2005 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究 愛知淑徳大学医療福祉研究, **1**, 85-93.
- 田引俊和 2008 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究 医療福祉研究, **4**, 98-107.
- 高本真寛・服部 環 2015 国内の心理尺度作成論文における信頼性係数の利用動向 心理学評論, **58**, 220-

235.

登張真稲 2003 青年期の共感性の発達：多角的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.

山口智子・高木 修 1993 ボランティア動機の構造について 日本社会心理学会第 34 回大会発表論文集 pp. 224-225.

山本陽一・松井 豊 2014 中高生のボランティア動機、ボランティア活動の援助成果の探索的検討：感想文の内容分析を通して 筑波大学心理学研究, **47**, 37-45.

(受稿: 2016.9.30; 受理: 2018.2.6)
